エスペラントはなぜ現代に於いて普及しなかったのか

中３―C―１１　兼久　義洋

目次

はじめに

第一章
　第一節　そもそもエスペラントとは
　第二章　エスペラントの歴史と現代の位置づけ

第二章
　第一節　エスペラントの欠点、利点
　第二節　学校でのアンケート

　第三節　　まとめ

おわりに

参考文献

はじめに

突然だが皆さんエスペラントと言う言語をご存知だろうか。おそらく大半の方がご存知ないだろう。『エスペラント』それは人々が言葉の壁を乗り越えてつながりあうために創られた人工語である。(一章で詳しく説明する)。しかしながら現代では知らない人も多く、普及しているとは言い難い。エスペラントはなぜ現代にも普及しなかったのか。その理由を探っていきたい。またこの論文では、大衆が古くから使い続けている言葉(例えば日本語、英語などの言語)を『民族語』、エスペラントの様な個人や団体が目的をもって人為的に創った言語を『人工語』と表記する。また、母語の事を『第一言語』、第一言語を習得した後に習得した言語を『第二言語』と表記する。

第一章

第一節そもそもエスペラントとは？

エスペラントは１８８０年にユダヤ系ポーランド人、ルドヴィコ ザメンホフにより創設された国際補助語である。

世界中ですでに使われている言語に成り代わるというのではなく、母国語が異なる人同士が意思伝達をするために使われることを目指した。エスペラントの単語は国際的に広く使われている単語が由来となっている。

文法について

アルファベットのうち、ＱＷＸＹを除き、ＣＧＨＪの上に^のついた文字を加えた合計 28 文字を使う。文法は使いやすいように単純に創られている。単語の品詞は語尾で決まり、不規則動詞は無い。単語において名詞は o,形容詞は a,派生副詞は e で終わる。

これらの法則には例外がない。

活用の一覧

現在形

動詞の語幹＋as

不定詞

動詞の語幹＋i

過去形

動詞の語幹＋is

エスペラントの普及について(戦前)

エスペラントが創設された当初はヨーロッパの知識人の間で広まり、中国や日本の様なアジアへ広がっていった。

作家の宮沢賢治や民族学者の柳田國男もエスペラントを学び、熱心に取り組んだ。また

１９２２年、柳田は新渡戸稲造とともに、国際連盟にエスペラントを公認の言語として採用するように求めたが、イギリス政府やフランス政府の反対により否決された。

日本はエスペラントが上陸した最初のアジアの国であり、それには二つの経路がある。1つは日本に住むキリスト教の宣教師が持ち込み、もう１つは、小説家である二葉亭四迷がロシアのウラジオストクで学び持ち帰ったものである。１９０６年に日本で初めてのエスペラントの入門書が刊行された。

第二節　エスペラントの歴史と現代の位置づけ

エスペラントの創設者であるザメンホフは１８５９年 12 月に当時ロシア領であったポーランドで生まれた。当時のポーランドは、言語の異なるユダヤ人、ポーランド人、ドイツ人、ロシア人のグループに分断されていた。ザメンホフは言語の異なる人々が対立することに、心を痛め、全ての人に中立的で使いやすい言語が必要だと考えるようになった。それにより、彼は 13 歳の時、ワルシャワの中学校に通いながら国際語を創ろうと試みた。彼はラテン語、ドイツ語、フランス語などを学びながら、エスペラントの構想をまとめていった。

エスペラント運動は労働者の自由と連帯を求める国際プロレタリア運動と結びつくようになる。しかしそのような動きは帝国主義の国家には邪魔なものとなり、弾圧されるようになる。ヒトラーは自身の著書『我が闘争』の中でエスペラントを『ユダヤ人による世界征服への陰謀』とし、ナチスドイツが政権を握ると、弾圧の激しさが増し、エスペラントは禁止された。ザメンホフの子ども達も強制収容所に送られ、殺害されるなどしている。

一方旧ソ連では、ロシア革命の時期にはエスペラントは労働者の国際連帯への共通言語として広まり、使用する人も増えたが、スターリンの『一国社会主議論』が勝利を収めると、国際主義の退潮とともに使用も減り弾圧の対象となった。この二つの弾圧がエスペラントの使用者を多く減らす転機となった。

現在、エスペラントを話す人は全世界で 200 万人ほどであり、そのほとんどが第二言語として使用している。エスペラントを第一言語と使用している人は２００人から２０００人程であると言われている。しかしこれら数値の調査方法は公表されていないので信憑性に欠ける。エスペラントを公用語としている国は現在ない。自称国家ローズ島共和国はエスペラントを公用語に採用したが、翌年イタリア海軍の攻撃により、ローズ島共和国は消滅した。

ハンガリーやブルガリアでは国家試験をエスペラントで受験できる。また、wikipedia はエスペラント版も存在し、wikipedia をエスペラントで読むことが出来る。『はじめに』で現代に普及していないと書いたが、全く使われていないと言うわけではないのである。

第二章

第一節　エスペラントの利点、欠点

私は資料を集める前、『エスペラントの文法に致命的なミスがあり、使い勝手が悪かったために使われなかった』と思っていたが、資料を集めたり、日本エスペラント協会のホームページを読むなどして調べていくに連れて、文法の使い勝手には特に問題は無かったと考えた。その為エスペラントの利点と欠点について考えていき、詳しく考察していく。

エスペラントの利点

1　特定の民族、国家などに対応しておらず、誰もが中立に読み書きができる。
2　単語を文字通りに発音するため発音しやすい。（ローマ字読みに近い）
3　動詞の変化が規則的で覚えやすく、基本的には例外は無い。

エスペラントの欠点　批判

1　エスペラントには文化がなく使いにくい
2　あまりに覚えやすいと民族語との間で混乱が起きてしまう
3　文字が英語のため結局、英語を母国語としない人々には不利である。
4　英語が広く普及しているため、わざわざ新しい言語に変える必要はない。
5　そもそも人工語である

各利点、欠点を詳しく説明していく

利点

1　特定の民族、国家に依存していない事について

エスペラントはどこの国にも属していないので、母語を他人に押し付けることなくコミュニケーションを取れる。

2　単語を文字通りに発音するため発音しやすい。

英単語では発音しない単語があったり、発音が難しい単語があるが、エスペラントの発

音は文字通りでローマ字読みに近く発音しやすい。

３　動詞の変化が規則的である。
　英語には不規則動詞が多く存在し、覚えることに多く時間がかかるが、エスペラントには不規則動詞が無いため、覚えやすい。

欠点　批判
１　エスペラントには文化がない
　エスペラントは人工語のため文化などない。母国語と異なる言語を学ぶ時、その国の文化を知ることが動機となることが多いがエスペラントには文化がないので動機ができにくい。

２　民族語との混乱
　エスペラントの文字は英語の流用であるが故に、あまりに普及しすぎると『書いてある文がエスペラントなのか英語なのか分からない』という混乱が起こることが考えられる。

３　文字のほとんどが英語の流用である為、英語を母国語としない人には結局不利である。
　エスペラントの単語は国際的に広く使われているものから選ばれているが、結局英語と同じ様な文字を使用するため、覚える難しさは変わらない。結局、アジア人などからすると『英語より少し覚えやすい』というくらいである。

４　英語が広く普及している為、必要がない
　日本や中国、カンボジア、韓国など、英語を義務教育で習うアジアの国も多い。フィリピン、ナイジェリアの様にアジアやアフリカにも英語を公用語としている国も多くある。その様に英語が広く国際的に浸透している。故にわざわざ国際補助語を学び、国際社会で使う必要はない。

５　そもそも人工語である
　人々が普段から使っている民族語は太古から大衆に使われ続けられ、誰が創ったのかもわからないので、欠点があっても批判は出来ないがエスペラントは人間が造り出した人工語であるので批判することができる。

第二節　学校でのアンケート

私は一節で『エスペラントの文法には特に問題がないと考えた。』と書いたが、これは私のみがそう感じただけなので、エスペラントの使いやすさについてのアンケートを行った。

このアンケートは４６期生を対象に classi を通じて行い、解答をした人数が 80 人を越えたところで集計した。

アンケートの内容と意図

１　エスペラントを知っているか

→エスペラントが校内でどれほど知られているのか。本当にエスペラントは普及していないのか。

２　１で知っていると答えた人はエスペラントを書くこと、話すことができるか。

→エスペラントを使える人が身近にどれくらいいるのかを調べる為。

３　１で『知っている』と答え、２で『できない』と答えた人。エスペラントについてどの様な事を知っているか。

→エスペラントについてどのような事を知っているのか

４　英語が広く国際社会で使われていることに疑問を持つか。

→民族語である英語が広く使われていることを疑問に思うか。

５　もし英語に不規則動詞(take took taken)等が無ければ、使いやすくなると思うか。

→エスペラントの文法には不規則動詞が無く、それがエスペラントが使いやすい点の一つと言われているが、それは効果があったのか。

６英語を習得する上でどの様なことが一番難しかったか(複数回答可)

選択肢　１文法を覚えること

２不規則動詞を覚えること

３不定冠詞(a an the)などを使い分ける事

４その他

この質問で『その他』を選択した人には具体的に何に苦労したか書いてもらった。

→エスペラントの不規則動詞がない点、不定冠詞が無い点などの文法の簡略化が適切だったのか。また、英語を母国としない人が英語を学ぶことの難易度をどう感じているか。

アンケートの結果

設問１　エスペラントを知っているか

結果は知っていると回答した人が４人、知らないと回答した人が９０人であった。このデータ
により、エスペラントは名前ですら知られておらず、お世辞にも広く普及しているとは言えない状況であると考えた。

設問２　設問１で知っていると応えた人、エスペラントを話すこと、書くことが出来るか

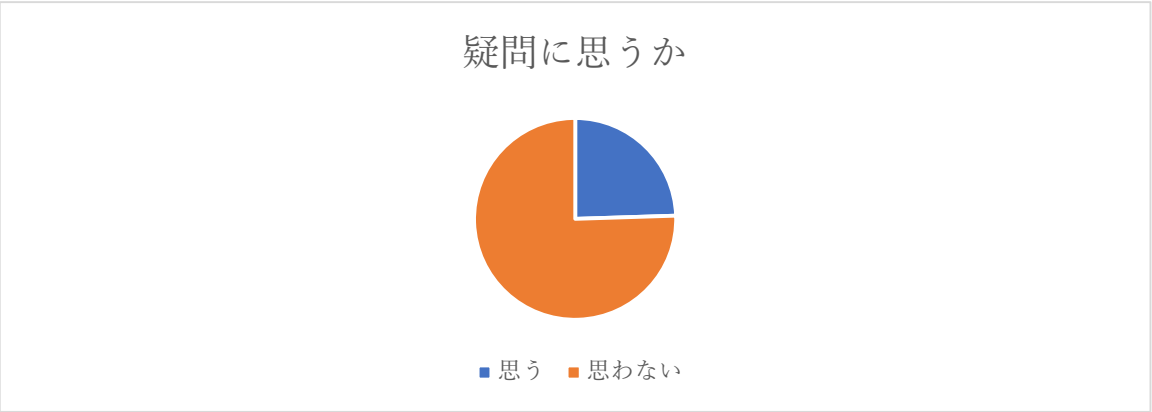
１で『知っている』と答えた４人の内、エスペラントの読み書きが出来ると答えた人は１人もいなかった。設問１と同じようにこの結果からエスペラントは広く普及していないと考えられる。

設問３　設問１で『知っている』と答え、設問２で『できない』と答えた人はエスペラントについてどの様な事を知っていますか。

この設問に回答した４人の内エスペラントの歴史など詳しい事を知っている人は １ 人のみ

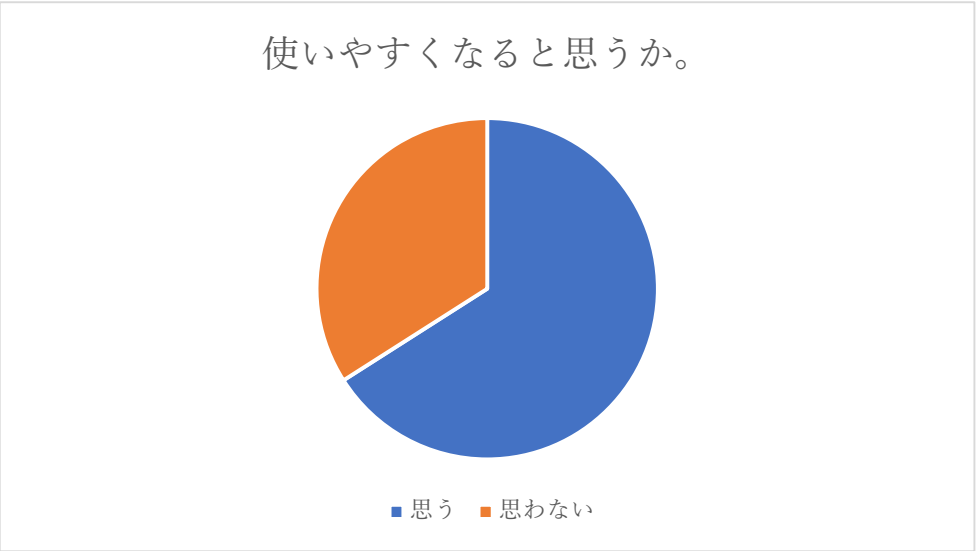
で、他の３人は名前だけを知っていると回答していた。この結果により、エスペラントをよく知っている人はごく少数で知っている人のほとんどが名前のみを知っているという具合である。これも設問１，２と同じようにエスペラントの知名度の低さが伺える。

設問４　英語が国際的に広く使われていることについて疑問に思うか。



この設問で疑問に思うと答えた人は 23 人、思わないと答えた人は 71 人であった。英語は国際的にひろく使われているが、全ての人が英語を母国語としているわけではない。私はそれ故に、国際的に使われるのは不適切であり、国連のような国際的な公共の場で使われる事を疑問に思っていた。よって国際的な公共の場ではエスペラントの様な多くの民族に平等な国際補助語が使われるべきだと考えているが、アンケートの結果を見ると、疑問に思っている人は全体の３分の１以下であり、多くの人が疑問に思っていなかった。この結果から考えると、国際補助語の必要性は低く、英語で事足りていると考えられる。

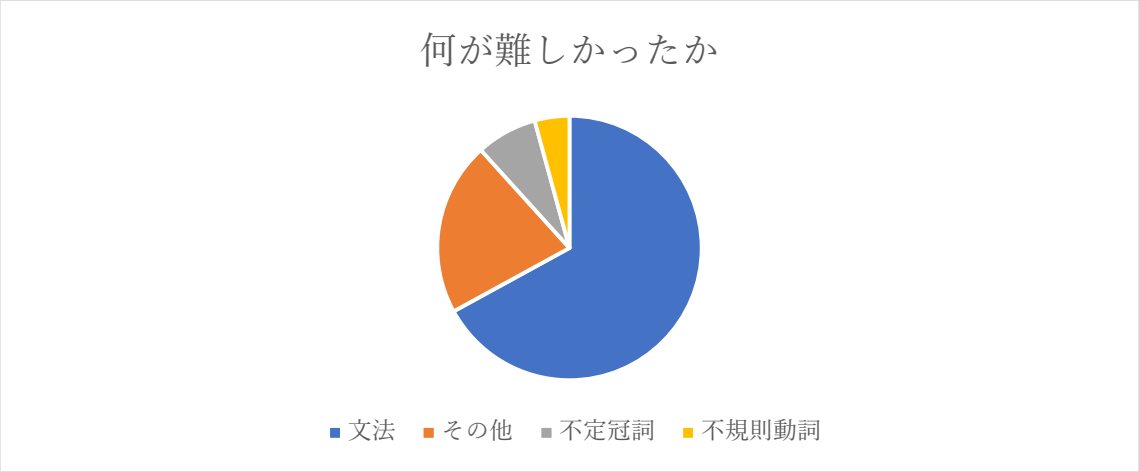
設問５　もし英語に不規則動詞が無ければ使いやすくなると思うか。

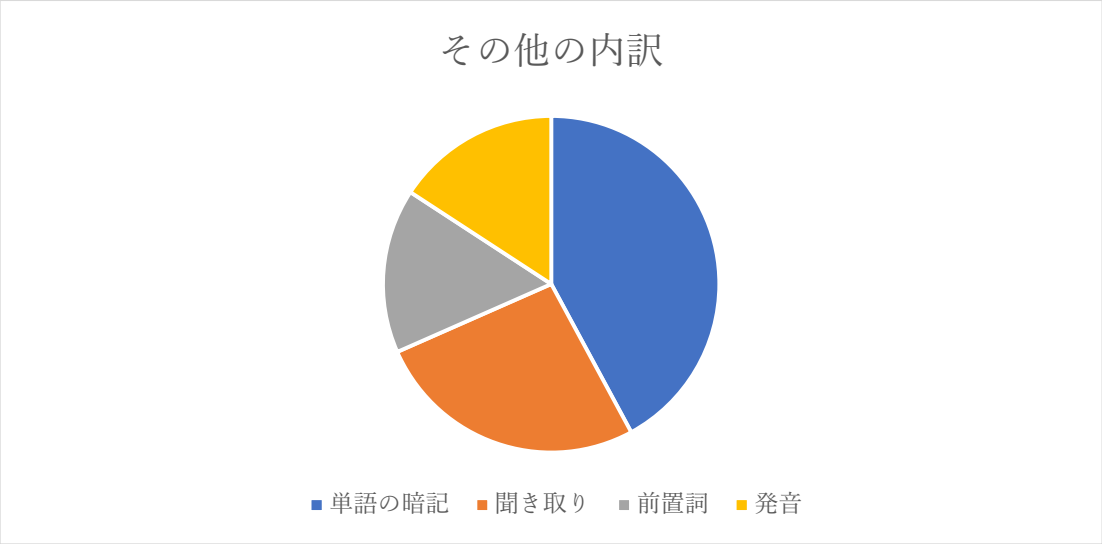


この設問で『思う』と回答した人は全体の約３分の２である 62 人で、『思わない』と回答した人は 31 人であった。この結果により、エスペラントの不規則動詞がないという点は、文

法の簡略化への有効な手立てであったと考えられる。

設問６　英語を習得する上でどの様な点が一番難しかったか。





この設問で各選択肢の回答数を順番に上げると１位は文法を覚える事で６３人、２位は不定冠詞の使い分けで７人、３位は文法を覚える事で４人、その他と回答した人は１８人であった。その他の内訳は、単語が８人、聞き取りが５人、発音が３人、前置詞が３人、記入無しが２人であった。エスペラントは文法は簡略に創られ、単語は国際的に広く使われているものから選ばれているのだが、結局のところ新しい文法や単語を覚えなくてはいけない事には変わりない。発音は単語通りに発音するのだが^の付いた文字が増えるので難しさが無くなるわけではない。

第三章　まとめ

アンケートや情報収集から考察したエスペラントが普及していない様々な要因をこの章でまとめる。

要因１　ナチスドイツ、ソ連による弾圧

本論文では詳しく扱わなかったが、この二カ国による弾圧によりエスペラントは使用者を大きく減らし、それ以降数を回復させる事は出来なかった。

要因２　英語の普及

英語を公用語又は準公用語とする国は 50 ヶ国以上存在し、アジアからアフリカまで多くの人々が使用している。英語と文法などで近い言語も多数あり習得しやすい。そんな英語が広く普及するのは必然であり、エスペラントの様な国際補助語の必要性は薄まっている。

要因３　国際社会で使われなかった

一章で述べたが、エスペラントを国連の公認の言語として認定することはイギリス、フランスの反対によって拒否された。それ以降エスペラントは国際社会で使用されず、英語にとって代わる存在にはならなかった。

要因４　新しい文法、単語、発音を覚えなければならない

英語が国際社会で使われていて、日本や韓国の様なアジアの国でも小学校から英語教育が行われている。このように英語が深く浸透しているなかでエスペラントを国際社会で普及したとしても、人々は新しい単語、文法を覚えなければならない。その労力を考えると、英語を使う方が容易い。

要因５　英語への信頼

アンケートの設問４により英語の普及を疑問視する人は全体の三分の一であった。一つの民族語が広く使われている事への疑問が無いのなら、国際補助語の普及への意欲も少ないのではないだろうか。

終わりに

私は本論文を通して使いやすい言語を作る難しさ、言語を広く定着させる為に必要な時間の膨大さに気づいた。そこから沢山の人に何千年もの間使われ続けている民族語の大切さに気づかされる。本論文を読んで外国語だけでなく、エスペラントを筆頭とした国際補助語に興味を持っていただければ幸いである。

謝辞

最後になりましたが本論文を書くにおいてご指導いただいた徳永先生、アンケートに丁寧に回答して下さった 46 期生の皆様、本当にありがとうございました。

参考文献

安藤信明『ニューエクスプレス　エスペラント語』　白水社　2018 年

田中克彦『エスペラント-異端の言語』　岩波書店　2007 年

和田登　『武器では地球を救えない　エスペラント語をつくったザメンホフの物がたり』

日本エスペラント協会　ホームページ　https//www.jei.or.jp